

韃靼勝敗記

二



門遠18
補 423
卷 2



韃靼勝敗記卷之二

○喀爾喀王麻喇拔兒と拵く事

喀爾喀代司馬翼より十分の勝利と爲り韃靼勢も遠く
陣と互けしるる三方の出陣の勢と城中より出て軍勢と烈
めけ卦と北京へ奔るる後我の術ととるる去程も抗
山の麓なる麻辣拔兒むらが廬ふ卦より馬見軍を供養に
多の幣物と多物を取ると日と夜で麻辣拔兒むらから州
より案内せしるる麻辣拔兒むら自ら出陣へ赴きしるる
より来るやと同く馬見軍を養へて曰く我の喀爾喀
王の信ふ馬見軍と中者也主君の命とすけ

夏小来りしハ飯の養又あつども主君喀喇喀王
王威儀へ苛政うて友吏権と治より民の困窮泥難足
る小恐ひど義若と奉る既小至勢微小押寄しよ至勢微
みの北京の名物司る翼よく措移りけ度の合戦味方樂
智計小陥りて悉く敗走を是味方よ統軍師なきが故也
是君我君の軍と接けく民の塗炭小落入と救ひぬとの
使たりと理とそくして速くれば麻練抜思むる完示とく
差へくさ中我けけ山小宅り天橋と登るよ北京の治世既
小一變の時あるありし中華の南天又祥瑞の象感くと
勝り是則王政とさる所の事あり中央よの救氣降くとて

北京滅亡の時軍を冬く小方に怒り形りきて難絶よ若
乱の起らんるあつが知るあく我元来古清の虐政と患
へ山里に牙と強をとりども討の事と東海は避く文
王にははへくちん皇の例もあまひ辛り喀喇喀王
石と香まんやと云馬見軍大に恨む三年誓首して
是を再進よ我れあつ我君の幸福使者の面目是ふるく
うらど是則天命なりと垂よ伴ふく是勢よ討る陣よ
ゆり喀喇喀王へ移と告りける喀喇喀王
詔に斜るる陣亦よ出る敬と形りける麻練抜思むる
も王の誠心と感り主君の約と治し垂よ大元師小派して

軍事と毒ねしぐの麻辣抜思むら大任とあり日味外
 おおと城のゆうを地の裡と考へ一日客喃客主
 ふうのおおと中極勢南城と考つるよ要害堅固ふ
 して智謀の勇士終り居まむ力攻を溜入と終ふ
 まど去とて尋者の深界と用ひぬ城おろく憎つて反骨
 の計策と用ゆること必せり我又そ裏と計り討んば共
 深計の意なるを苦とすまむ假令味方よりとも獲りし
 發まゝある深計の極と叫まれば客喃客主
 大は恨む因とこれ麻辣抜思むら味方と下知して清兵
 の人ふ小賊とちく数万人と集り十分と集と集と世

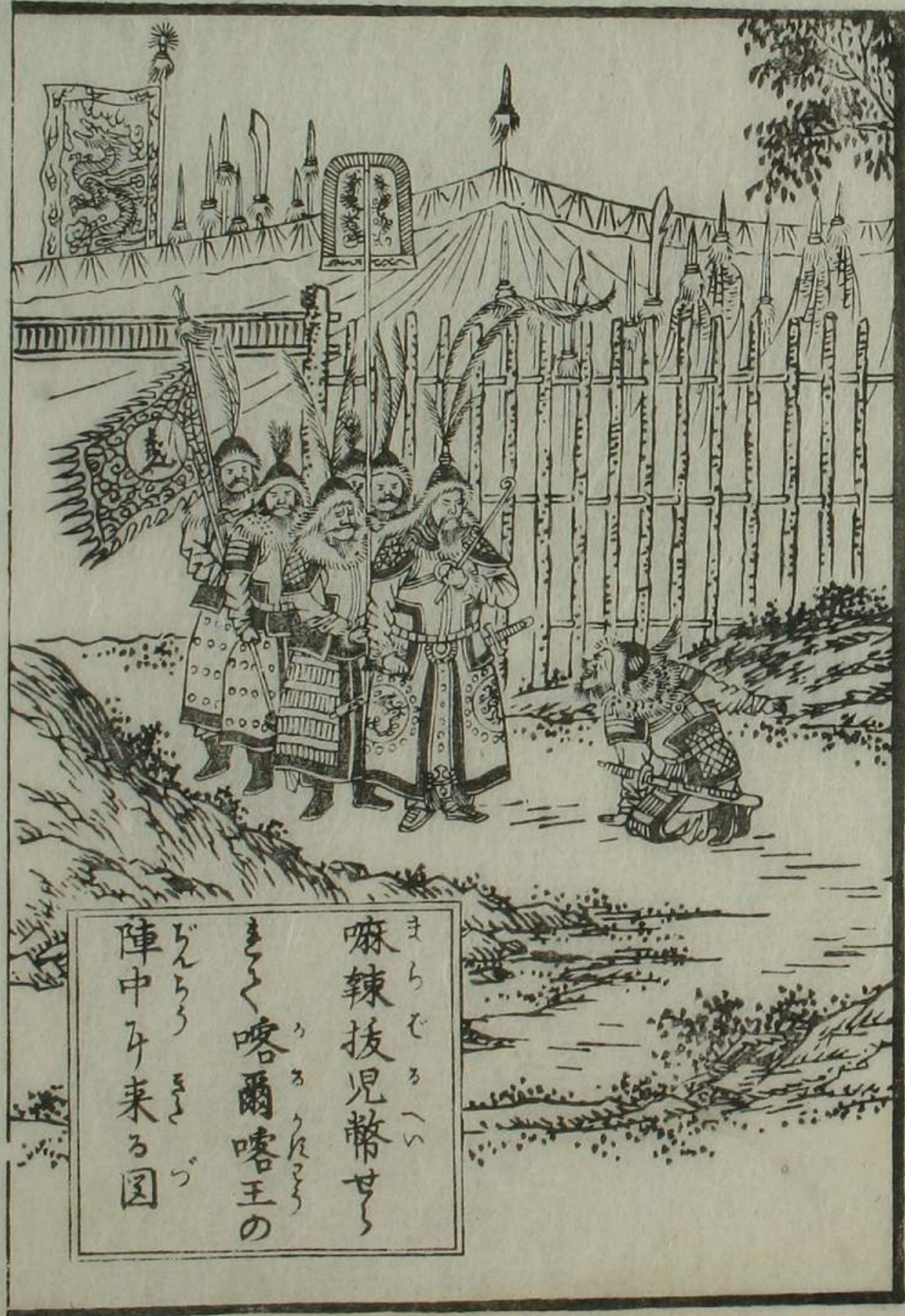
ダツ二二

情け盡来栗陰孫某の終と集め儀し牛馬本車
 横で彼百姓あふおおと愚弱城の属はより若松上の子
 と押し墨籠とて急せらるる城お司る翼し槽のう
 より是と見とく大は勢ひ難難の匠支拙と計策と没け我と
 計らんとい斥抜痛し彼はち氏の南城へ若松軍進の者を
 匠付の体とるし城中より討つ出その氏を殊中し引入
 ちのいそ盡と案と軍勢と終まのせ城は火と掛んと計
 略の必なり方今思戲の小沢かとも極の深計の著り
 て重蒙りとも能知ぬ我何ぞ計界と案と若松軍
 進の氏とゆけと城中に引入るをせん督く打控盡て

審みと凡そ款勢多く治より巨樹と被末が冥び暮る所の
兵粮と奪りんとする形勢をなすべしと大地も凡そ故く一云
小士卒を威心し擗くにまゝと是と凡そ案を遠く
治より種親の大勢兵粮と奪りんと追奪る隊中是と凡そ
て大ねの明察遠く影の後よりも明らなり噴法智ある
結構中にて及又動と是ひるる程なく隊をく冥び暮るを
治より種親の大勢兵粮と奪りんと奪りんと切伏殺すに
敵ふよぞ是よを「百姓未隊又向つて子く救ひありま」と
お累と是しと旗幟と打振て是れが隊は是と凡そ
に下知してまやあ可あしと款の汁策うか小児の戲ま

ガツ二ノ三

もね者まりまが討く如く及百姓とたは種親の過虫を慶
けして呉んと大門まると押陣を打撃はあまを「百姓者
救ひの如くぞ進めく共々に喰りく押を月と終ひなく
して百姓系を序擗より切伏く巨捲るうぞ百姓系作天
報親たる中より是く麻練抜兎むらゝの指骨と交するみ七
人跳りぬく大音と喰りるる我くは救百年の國惡と
報せんぬよ兵粮と奪りんとすると疑ひ却てお救りくを
懸るよ是れ我くと救ひ後ろの種親と巨拂ひあへと喰り
まれば隊親司る翼がかくくと打撃ひあやを誰と
井のふを清く名を清る司る翼うかちるぞ種親の匹支が經



まらびるへい
 嘛辣拔兒幣せ
 まく喀爾喀王の
 陣中より来る図



タシノ田

舌とつて欺んくする不欺収御用推さくくはと程と烈
 一切をまじり百姓系溜りも持てるおと打捨て大はたは
 不を毛る捨てるおに目を無ど城兵をんで後の難勢は
 面もあつて突入く妻二を又攻まらんが難勢を毛に
 切まらして敗走を司る翼より下知して苦を纏めま
 百姓系が打捨てる儀おと一雨集め足かするよいつら
 疑りくさ品よあつて属必よりの運送お送をくれが司馬
 翼より始めく程さ集めて我思面を毛しして却て團
 の勇と振るけよの對陣小月と重く城中苦戦之く
 城之儀使する共無どぶくは嗚呼さるる程及ばざら
 〆二ノ五

下くといは是おの事とえんと欺息くくく共程と取収め
 程も防戦をくはは「難の大軍師麻辣抜見くくを敗軍と
 集めく引退を味方ふふして曰く欺おふ後悔とまきこの
 一我信り成就をまきありと悦びそり

○黒龍落城の事

檣城輝と親くば野多嶋嶺と親ふと置方るる黒龍の城
 代司る翼より智保とつて難難勢と悩む亦難難の麻
 辣抜見を加りてより油計と役け攻くるよ己が智保
 敵の係を惜りてくあつて切捲りしに麻辣抜見をわんか
 ねく係りし事なまき再び城攻の用をこして先く共程

運送のどくに刃せけく懐の中へ火硝燄葉ホを入
 牛馬あるひを車小積を扇葉の若み子他人士氏の体は
 是を其の士氏打混して却合一百餘人あのごく燄少向
 つく運ぶゆゑに次より麻練抜見むら 悪軍と指揮し
 て是萬方燄おきと見えく大は降りしりども先は若親軍
 是のち氏と切く後悔のちるまひをぞおせし下知して
 曰く我先は敵の條計うんと敵し其の若親軍是のそ
 氏と切く後悔せり今又お来る所の若親軍は強りけ
 まども若親軍つて其のち氏なるを切捨むいよく去清の政
 幸密なるべしと信お孫母暴悪の奉勅とる仁意の

政事行ふまごと世に流布する時清の若親軍より大
 なるなりそと敵は若親と奪ひけりまら親翼は流
 多小同いうらん彼は若親と切し氏と救ひ燄中に安んず
 と此し美なるべし若親を貴し勇杜の若親を軍役は百使
 りが忽ち二の使ありすく討て若親と是はけり
 休門を用ひ司馬翼より自ら其先を先を馳出せば是
 殺害の難ひ小積情つる燄若親も若親と一と馳出し長
 親軍のち氏と救ひ後ろの難親勢と討率ごんと勇とす
 んて切菟を難親の軍師麻練抜見むら 是と刃て我孫既小
 成まり左右を顧みども痛く血戦しては一奉不敵と成

あまはと下知さるる難難悔いけり教度の合衆は敗世に
傳と書んと死情の勇氣日比も百倍して麻練抜思
の不知小意にて款切に突とも素もむせに執行するは子
をその死難を踏敷く突入を付るれども信是と敵りもを
息をも徒と改まる敵の司る翼より別勇を敵の大ねた
士卒する勇氣運くは又敵の敵ひよ素と滑る狂率
るまが何まも劣らむとたうらむけ滑る麻練抜思
降り一ち或ふ女も一百万人難く敵中へ入るは敵り
ゆり一者吾等と相べんとする時層も或はに云やう先
軍てお集り」苦難とて其の苦難も今秋にがお集る儀

三十七

あまはと下知さるる難難悔いけり教度の合衆は敗世に
傳と書んと死情の勇氣日比も百倍して麻練抜思
の不知小意にて款切に突とも素もむせに執行するは子
をその死難を踏敷く突入を付るれども信是と敵りもを
息をも徒と改まる敵の司る翼より別勇を敵の大ねた
士卒する勇氣運くは又敵の敵ひよ素と滑る狂率
るまが何まも劣らむとたうらむけ滑る麻練抜思
降り一ち或ふ女も一百万人難く敵中へ入るは敵り
ゆり一者吾等と相べんとする時層も或はに云やう先
軍てお集り」苦難とて其の苦難も今秋にがお集る儀

支ゆる款と切伏突伏燃ふ入と刃まび子二三の廓二十餘
ヶ所の櫓あり火氣熾くと燃より僅ま丸をりぞのそり
たる刃より麻練抜見むる意もあつせど是も是も火と
活ぐに燃ちく垂ちよ丸小廻入と隙門壁く因縁り狭
炮大筒と打出必死と氷く防を戦うを難絶勢も状
怯て刃くこれ麻練抜見むる下知して曰く霧氣却て
猶と喰の難くあまの急又攻討のたうれ味方十分の後利
うまび廓と味方のわく軍と屯一是と是掛りして
たくりく款おいう小程勇ちまびとて争り傷つととゆんと
介廓と若と互け勢と分て火と消さしめ士卒の言まを

ダウニハ

体めろる司る翼より既に討つべしと幸ふして血海と
用さか丸を引いと味方と敵と僅ふ人うらむらうり
疵と毒る者多くしてあつて合戦して難絶勢と退
んと思ふもあつては残りとしては丸をちり落致する
とも種のお勢八方より攻掛る一時も漏るべしと意
ねば勢者と集めく若て曰く我智盡漬くして款の
小欺りま南條のどく急も迫るのそなるは多く乃軍
勢と矢の刻へ左清眼目の要地と款のおま端へ入ら
は是皆我飛なり汝未我と一刀つ切さけ怒るとあせよ
我死して後けりよと少系と海へ帝の送禱とあめよと候

と驚くお逆まの集まの徳長矣日同音ふまへく曰君が
 勇名曰海ふ書くと異ども天命の終る志むるありて
 是らざり死敗軍に及ぶも馬ぞ君の飛とすふわらむを
 信未まて争う君と怒まん終くの君が黄ら水と流ひ野
 ちとそさんと救くが心をよそと勇氣をんくうてお
 速まの司る翼より大ふ心は汝おが心を海は是り汝ら
 去清累代厚忠と報せんがふよ我と昔よ余の流り故ふ
 南り憐と極よ討死し一氣勇の名と後母よまさんと一愛し
 いでる我の一献と汲んとおと共よ酒あやを司る翼
 より妻室幹女いんもけ席ふ連るりし酒酣ふ及ひて

秋篠をその哥小曰く
 力拔山兮氣蓋世 時不利兮騏不逝
 騏不逝兮可奈何 幹兮幹兮奈若何
 と少秋懐慨涙数滴ありて舞終まの文と始め並居るおを
 も幹女いんが心を案し終る感涙と催しるるが慥てある
 事と事とをねが法士まふころろと励まわん又順違ふ意
 とおしし碑とそし勇と食んで已がおほくくへととる泣
 ろい幹女いん文のあにまぐやろろの妻君ふ嫁してより子
 く三年の情と慕り比翼連理の親しとも只一膳の愛と心
 新出しるい何と碑ある者もたなく名跡のそぬ玉流にの水



黒龍城主司馬翼
 最期酒宴々妻室
 幹氏歌舞の圖

多
 丁
 十

上をきく海の剛強りとて武門の常ひなるまはるる會をて
討死の元より是のちのちあまひ今更留ひらふ河は「妻
の名は又明日の君が元帥の合戦ふ妻も伴ふせぬ」と
これに司る翼もも幹成はん松忠像り不役の者の河
と物もは裂裂を着るよる凝り決る心も碎る計り共
ん弱くては叶りてと慈と河と荒らげで汝婦女子とて
去清徳代の武臣の女は幼く及んで未練の一云義勇とみ
ぐく多の戦場も是も満きて女を具せしと後代まぐ
恥辱をきと口惜し汝もは又留まりて我を死と見
しといはして道ま出合と合く我を死と吊ふそ貞

心烈女の飛渡るべしと勇を合んできつまはるる方なく
流くも袖と涙はてはぬ又難の軍師麻練扱思
勢に下知して敵名は又本丸より引籠るとも先來
勇の大拍をまはるる明日の合戦の定めて討く出
べし梁が死骸の種威うの小勢もまはるる難うん
とて初る勇を炮矢のト小討まんて味方勇もまはるる
まはるる一と徳と慶不せん徳計と後け敵外より引退
野小陣と布と色又押あんとせむけり司る翼も
る勢も千餘人と流る強弱と呼吸も秘蔵の思ふに打騎付
てあさり麻練扱思なる羽扇と打振味方と拍けは三方より

一時は押寄致しよは痛くも南は敵を怒らしめてい
きり又死て是しての廣言一歎と悩むる教友ありて
まゝ麻練振児毎の上より羽扇とて指揮をたれ
の躬も入替り攻悩をまゝあゝ遠りけし時本丸は
氏しんいお小吏の出陣小滝りんとを乞ふく号
勢くも面ととらふ若生妙つと受目と刃の忠し
百俵をべしいともして支と共と付死し死出三途
てこそをまをさちと独の心を改し密に後と利と
と成男子の安をおさるるは跨り青龍刀と小徳は
張又強付く軍の振ふと刃るは味方の歎又悩ま
るる勇氣攬

卷二ノ上

とて見へるは遠の口惜と味方の中と強振て又押寄の敵
勢に面も振ど切入て敵教友と付死を身も苦うまの
是とをかりと向く紐ふ果うまでぞ死しつりり司馬翼
しん是とをかりと向く鳴呼健を成若者うか染い惟は
強るあへ士卒も人死来り大物のあうり只今付死あり
しん幹吏人じん君をては出陣と死るるまも君降し
あつど強りとして強は存命を善目と見んより君は
付死し強卒と勸き二ツの後世と名を烈女の名をのこ
さんふ如くとけ文をまゝしと出陣し強敵の死り付死あり
ありと一毎の文を寄る司馬翼の用と刃るるは名をのこ

と連て美らうのまふ宵くと流び世の二世二世と怒るぬ契り
と係切よちし一り返勇程絶倫の大おも涙も号く唯度
まこり婦女子もさう物のごくちりふ我何ぞ死と怒る命を
惜まんいで涙よく涙を運んと解る故又絶へく大音上
うて難靴の小秋未終く承りまを清ふき者ありと嘆き
司馬翼よくなるぞ今軍令をきて我と怒る我と怒る者
をを考て我首と死と嘆りく南と考へ切たりあふ
程歎の味方を省きべみ十人耳小打ちそれ皆罹疾法
と負これい今い是とたりと一方の血をぬき小言とあふ
張より獲後控切あふ細小首と控後してと死

卷之三

たりたる大お初のごくちりまは後卒是と死て一人も終るは
井のひくは討死を嫌む一司馬翼よくを智仁勇の三徳
と名一名おちまは清の作映免がれど軍令をて麻練
扱思むが清計ふ落入りの玉粒とつちも作りあり
○艾丹城攻北京後法の事
却後軍龍の代司馬翼よくが不打ち高より思新城
防戦の力をて既小落城に及むんとするの旨を海へい
於庭大お驍を急よ玉就城と救ふべと各部費永
小五万の軍勢を扱けとちり又打ちしめ新交武の百友
と云して浮良あるよ故勢玉就城と落しちがむ小艾

丹波亭古塔へ攻め入り疑ひあるべしは波舟の肉も
 艾丹の地へ北系の咽喉首田園才一の要害まで亭古塔へを
 清言経降地ありし由緒の旧地をまげ二ヶ所と小秋又襲
 りきていけりなれど兵を加へてくるべしと法園へ軍務催使
 あるは又定定を至終後法の曹永そつひ疾と日又法で義古
 の門科爾心と云ふを迎ふに子孫飛城攻落すま司馬翼
 しく討死し難經勢入替りたりと落武者の告と成て曹永
 そつひ大又勢を然るよ小勢もそそ謀の合戦後村芝来返し
 と所陣と法と北系又海ふ又難經の軍師麻練技思たるは
 察爾嚙王 ころろ 小獨して中ころい水系小獨とくするの要

夕二十四

地いけ黒龍城艾丹亭古塔の三所ありそつひなる黒龍城
 を既小味方の物と成まり然るは小勢と入並て最古後法
 と押へ艾丹と攻め難經と亭古塔とよま入北系示七分の
 弱もあり味方の七分の強と成れば要害具備せざる
 焉と片時もよく押寄せんと黒龍城代と好し艾丹は
 て出陣を科爾心と在陣せし曹永そつひ是を疑ひ知く
 急ぎ途中に打出おひ懸ると横合より二万餘騎も
 押寄せ大筒と打掛しつゝも怒りたる難經も思
 ひ寄るるそ大又陣易して又ころろ軍師麻練技思
 まらちを女も驚うど俄小獨へと立させ大筒快炮と打放

一挑と戦ふ中「後」後まども難犯大軍ちまは勢と分
 て少系勢小南よりしめを依の惣軍にけ戦ひと竹西又見
 て播磨播磨日とまひて艾丹をく押寄り艾丹城
 中けりしと知て存候と申て款の折みと頼りせ防戦の
 准儀とちと難犯勢小南と定め城の二方より攻まる城
 中わしもまはら火中又燃て防ご戦へい地戦のまろく
 あく後軍もせで流り救目と送りまろく少系よりの南
 城の援をくして羅金徳とくみ万の勢と申て難犯勢
 中に入んと難犯の陣よりおと掛りしと難犯の軍師麻練拔
 見むら軍旗と定め後法の款え大將喀嚙嚙王より自

向の城裏の麻練拔見むら軍旗と指揮してとてとて
 くと難犯もえ来要害堅固の城ゆへまはら難犯も
 日とまひて對陣を麻練拔見むらをなす者を出して諸
 方と頼りしむら一日麻練拔見むらが者遠く隔り
 来つと後法の羅金徳とく今夜夜付の支度あり由り
 わるくむらと若くは麻練拔見むら是と定てたもあん
 とんは難犯大將喀嚙嚙王の陣より獨して今夜
 表の陣へ羅金徳とく夜付と仕掛るの旨告る者あり染
 夜付せいの虚小南とて施をへき係りあり是別款より
 我は勝利とちつるの吉祥なり御る所能く諸のふは係



計のうきうきと中盤て又我陣より来る喀囉囉王
 ちけ若とて竊に用とる「黄昏より勢と出」並て
 行へ持来り「是遠の孫教百方と敵の出来とて道如小
 撤教し又居者の煩もみ千人づ左右に依る本陣悉
 く用とるは「静り居て待たる羅金徳らん」新とも知
 ぞと卒と下知して曰く「合戦遂れ時はいくくる愛り出
 来らんも計り難れいと宵の一發は敵の首と引提威
 豊帝の震懼と安んじならん汝等も勅もけ一發
 にありと遠の徳より斥候と出して敵陣と襲りむら
 喀囉囉王の陣の音もせむと海へいづらふとて想

勢に下知して敵への何の儀もなく安果と眠り居る一
 敵は攻めよと強るに敵を加へて強出せば士卒争り溜ら
 ぶと若勢潮の湧がごとく勇をそんで強行に何ぞ孫
 乃と撤するは遠の孫は人ると同りは是の表を突費うま
 先陣候しとちがう一寸もをむと終り後陣を知ら
 ぞ搦と搦で押来り先陣の勢を押し馳放をまんとす不
 同づく是と費うき働くる終り遠はいくちと敵は獲
 鳥る西へ左右に依る一方の煙は時をいよと鉄炮一交
 小打掛る音百々の雷よりも猛烈し喀囉囉王
 け鉄炮とお果し又数千の鉄炮と放し掛まは羅金徳と

が軍勢も魂天加小死ぶ出渡る勢母嶼地獄奴乃山を
 引中んと痛まうり形勢なり羅金徳とくも死地片
 落入りどもも弱くてい時りと味方と下知して壁へ係
 計に陥りたり在何程の事やある蓋と味方の形勢うか
 糸と拵て致へと血脈は成て罵まども飛来る矢玉の及より
 も熱く群は皆く是と傷ひしう羅金徳とく心を極く
 押へども能く去へる漸く及と求めて迎をるけさうい
 小時後り程なく我明ぬまの羅金徳とく二十里計に
 廣野又蕪と建て敗軍と集るるゆめ万の軍勢も或る
 河をあらひを迎て僅一万ふいさざり嚙嚼嚙主
 け勢ひ

と其よりいふとて新の勢を以て攻めたりて羅金徳と
 が軍勢もあ疾の戦ひも芳ましと火起りゆらん元の時
 に推してまゝ戦ひんとする我勢もなぐ一戦も及ぶた
 求りて迎をる却て後より又我後法とて押入りし
 曹永の難勢と一軍に臣れんと不意と付く在元より天
 軍との孫の麻練抜見むら軍配して勢を奪て押入る
 艾丹へ押寄しに曹永の公許ち合戦後るうりるあ
 都より羅金徳とく艾丹後法とて春り也と響て出
 心を安んぶつねもある故と臣稱ひ艾丹と救えと名
 ふりう羅金徳とく至極の疾付と仕掛却く大敗及

